

# 『点訳のてびき第4版』研修会のための資料

全視情協点訳委員会

## ■「点訳のてびき」発行の目的と編集方針

- a. 全国で標準化された点訳書を提供する。
- b. 「サピエ図書館」に登録する点訳書製作の基準とする。
- c. 規則は「日本点字表記法」を基に、点訳の立場で再構築し、「表記法」の規則に幅がある場合は、点訳の立場で必要に応じて選択する。
- d. 点訳ボランティア活動を実践する際の手引き書を主な目的とし、講習会では、目的や段階に応じて講師がアレンジして活用する。

## ■改訂にあたっての主な見直し点

- a. 「～てよい」の表現を見直した。  
条件がある場合は、提示した上でできるだけ言い切りの形を用いた。  
・「～てよい」「～できる」も用いているが、特別な定義づけはせず、一般的な意味合いで用いているので、巻頭の「本書の編集方針と構成」に用語説明を記載していない。
- b. 小項目にも見出しを付した。
- c. 記載事項が重複したり、前後したりしないように整理した。  
参照ページを入れた。
- d. 「Q&A」「指導者ハンドブック」「『初めての点訳』指導者用マニュアル」等の記載内容も適宜取り入れた。
- e. 第4章・第5章の用例のうち、32マスの枠に書き込んだ示し方を変更した。

## ■規則などの構成

- a. 「コラム」の他に、規則を理解する上でのヒントとして「参考」を新設した。
- b. 規則や備考などの位置づけは以下のとおり。  
本則：できるだけ言い切りの形にするが、例外がある場合は、「～原則とする」とし、【備考】などで補う。  
備考：本則を補う規則。  
処理：触読者への配慮を含めて、点訳上の処理の方法を示す。  
参考：項目直後に掲載し、規則を理解する上でのヒントや用語説明、特殊な原文への対応などを記している。  
コラム：規則・備考・処理などでは言い表せない点訳上のヒントや工夫の仕

方、注意点をまとめている。

- ・「コラム」には番号を付け、目次に掲載。また「参考」は内容の抄録を目次に掲載。

c. 用例は、「てびき 3 版」の用例を基本とし、全国から提案された用例、他の規則との比較上取り上げたい用例などを加えてある。

## 『点訳のてびき 第4版』各章について

各章ごとに【構成の見直し】と【改訂点など】についてまとめました。

★は「表記法」の変更に伴う改訂点、☆は「てびき」の方針変更に伴う改訂点の主なものです。

### 第1章 点字・点訳の基礎知識

#### その1 点字の概要

- ・「ブライユの点字配列表」を追加。

#### その2 視覚障害者の状況と点字の利用形態

- ・厚生労働省の身体障害児・者実態調査の新しい数値とともに、視覚障害のために生活に支障を来している人の実態を反映した、日本眼科医会の推計値を掲載。
- ・情報通信技術の飛躍的な進展による視覚障害者を取り巻く状況の変化。
- ・点字の利用形態の多様化。
- ・盲ろう者のコミュニケーションなどでも活用される点字。

#### その3 点字サイン

- ・街で見かける点字案内板、誰もが手に取る製品の点字表示 ⇒ 晴眼者が最初に点字に興味を持つきっかけにもなる。
- ・正しい点字で有効な表示が行われるよう、点字使用者・専門家の声を反映させ、すべての人が関心を持つことが大切。

#### その4 点訳者に求められる役割

- ・専門化・多様化する点字使用者のニーズに応えられる技能。
- ・点訳者相互および関係施設・団体のネットワークの重要性。
- ・点訳ボランティア養成の充実を図ること。
- ・点字の社会的認知度を高め、点字の普及に努めること。
- ・街なかでの視覚障害者の適切なガイドの仕方を広めることなど。

#### その5 点字の書き方

##### 1. パソコン点訳

- ・パソコン点訳のメリット

- ・自動変換ソフトとの違い
- ・BESを使用した点字入力にあたっての注意点
- \*改行マーク前のスペースは、「スペース+改行マーク」の検索により検出・修正することを習慣に。

## 2. 点字器

- \*凹面から書く点字器を使用する際に、凸面凹面の左右逆転に混乱が生じる場合は、左右でなく前後のマスの関係で捉えるとよい（初心者への指導に活用を）。

### その6 点訳・校正の位置づけ

- ・3版の「点訳書製作過程での点訳の位置づけ」を「点訳・校正の位置づけ」とし、併せて調査についてもとりあげた。

#### 〔点訳〕

- ・点訳者に求められる技能。
- ・原文照合しながら読み直す際に見逃しやすい誤り ⇒ 最後にデータの素読みも有効。

#### 〔校正〕

- ・校正に必要な視点、特に注意すること。
- ・それぞれの校正方法のメリット・デメリット ⇒ 担当者や方法を変えて複数回の校正を行うことの必要性。
- ・墨字データを点字に自動変換するソフトを用いた場合に注意すべき点。

#### 〔調査〕

- ・国語辞典を引く際は空見出しに注意し、語義が書かれた正式な見出しの読み方を採用する。
- ・複数の読み方がある場合など、記載された語義から、文脈上もっともふさわしい読み方を選択する。
- ・できるだけ複数の辞典にあたる。
- ・国語辞典の見出し語になっているかどうかを、点字で1語として扱うかどうかの目安にする場合には、7～8万語所収の基本的な辞典をよりどころにする。
- ・独自の仮名遣いを用いたり、「日本」などの読みを統一して配列を行ったりする資料もある ⇒ 凡例などを確認したうえで資料を活用。

## 第2章 語の書き表し方

### その1 仮名遣い

#### 1 基本的な仮名遣い

##### 【構成の見直し】

1. 直音・拗音・促音・撥音など（現代仮名遣いと一致する部分）
2. ア列・イ列・エ列の長音（                      ”                      ）
3. 現代仮名遣いとの相違点
4. 注意すべき仮名遣い（現代仮名遣いと同じだが間違えやすい仮名遣い、原文の表記によって工夫を要する仮名遣い）

の順に再構成

##### 【改訂点など】

- ・ 1-2. エ列長音の説明を変更  
3版では、エ列長音は「イ」を添えて書く（「映画」「衛生」など）として、【備考】にエ列長音のうち和語は「エ」を添えて書く（「ねえ」「お姉さん」など）と説明。  
⇒「稼いで」「招いて」「春めて」など和語に「イ」を添えて書く場合があることから、エ列長音は「エ」を添えて書くことを本則とし、【備考】に「イ」を添えて書くものをあげた。
- ・ 1-3. (2) 【備考1】 [参考] ウ音便について。  
1-3. (2) 【備考2】 長音でなく「ウ」と書く用例に注意。  
3版では、直音の箇所を迷うことのない語例と一緒に並んでいた「閏年」「未曾有」を、点字独自の長音表記を学んだ後に、長音でないことを確認する用例として、この箇所に移動。  
「ウ」を含む言葉として「子牛」「湖」「不運」「稀有」も用例に追加。
- ・ 1-4. (2) [参考] 「き」「く」「つ」の促音化について。  
3版では、促音の項の処理で扱っていた「き」「く」「つ」が促音化しているかどうかの判断について、用例を多くするとともに、漢字2字の語と他の語が結びついた場合、元の語を想起しやすいように書く視点が必要であることを [参考] に説明。  
関連する語との関係を意識できるように、「万国旗」「劇作家」「熱気球」の用例に対して、1. 用例に「国旗」「作家」「熱気」を入れた。
- ・ 1-4. (4) [コラム2] で「稲妻」「融通」はツマ・ツウの字を当てていても「ズ」と表記することを注意。

現代仮名遣いではこれらをタ行濁音で書くことも許容しているが、点字では現代仮

名遣いの本則に従う。

- ・ 原文で長い長音符号や複数の長音符号、複数の促音が用いられている場合、点字では長音や促音を一つだけにする（1-4.(5)【処理】、2-2.【処理3】）。

- ・ 1-4.(7)「現代仮名遣い」とは異なった表記がしてある場合は、正しい点字の仮名遣いに直して書く。

3版では、「歴史的仮名遣いが混じっているときは、現代仮名遣いに直して書く」としていたが、範囲を広げ、仮名遣いの誤りである場合なども含めた。

- ・ 1-4.(8) 現代文の中に挿入されている歴史的仮名遣いの語句や文に、とくに必要があって古文の仮名遣いを用いる場合は、点訳書凡例で断ることを追記。

3版では、この項と現代文の中に引用されている漢文を「その他の仮名遣い」の最後に扱っていたが、「基本的な仮名遣い」に移動。

## 2 その他の仮名遣い

### 【改訂点など】

- ・ 2-1.【処理1】児童書などに「キエ・ニエ・ヒエ・グィ・グエ・グォ・スイ・ズィ・フヨ・ヴヨ」のような、なじみの薄い外来語の表記が用いられている場合は、読みやすさを考慮してその発音に近いと思われる表記にすることができる。

- ・ 2-1.【処理2】外来語や外国語に使われている「ヂ」「ヅ」「ヂャ」「ヂュ」「ヂョ」は、「ジ」「ズ」「ジャ」「ジュ」「ジョ」を用いて書く。

3版では、「特に必要があれば原文の仮名遣いで書くことができる」として、映画「ラヂオの時間」をあげていたが、「ラヂオの時間」の例は法人名や商品名などを扱う固有名詞のところにまとめた。

- ・ 3版では「外来語・外国語の書き方」の処理に扱っていた、ワ行のエやワ行のヲなどを用いて「ウェルテル」や「ウォルポール」などと読ませる書き方は、[コラム4]「外来語・外国語の古い表記」で扱う。

- ・ 2-2. [参考]「ううっ」「ううん」などとある場合について。

- ・ 2-2.【処理2】原文で「う」が連続して用いられている場合の用例「がおううううう」が、3版では本則用例に説明なしで入っていたのを、最後の「う」を長音符号で書くという説明を記載。

- ・ 2-2.【処理2】[参考]「う」以外の文字が連続して用いられている場合について。

- ・ 2-3.【処理】「俺ァ」の用例追加（3通りの読み方）。

- ・ 2-4.【処理1】ワ行の「ヰ」「ゐ」「ヱ」「ゑ」は、ア行の「イ」「エ」を用いて書く（3版では、「エ」だけをあげていたが、「ヰ」も同じ扱いとした）。

- ・ 2-4.【処理4】[参考]「キヤノン」「キューピー」「オンキヨー」「シヤチハタ」などの書き方について。

## その2 数字

### 1 数の書き方

#### 【用例の書き方】

- ・「五百・500」「二千三百・2千3百・2300」などのように、何通りかの墨字表記を示すことにより、原文表記が異なっても、点字表記はそれに左右されないことがわかるようにした。

#### 【改訂点など】

- ・ 1-2. 【備考】統計資料や表中の数値などで、3桁ごとに位取り点を用いて書く方法は「大きい数」の備考の扱いとし、その場合は、中に4桁の数があっても、それ以上の桁と同様に位取り点を用いることを追記。
- ・ 1-3. 「.01」のように整数部分を省略して表記されていても、一般文章中では整数部分を補って書く。

### 2 数を含む言葉の書き方

#### 【改訂点など】

- ・ 2-1. 「五千円札」「1000万光年」の用例に000と仮名の書き方を併記。  
2-5. で「西暦2000年」は「2センネン」とは書かないことを説明。
- ・ 2-1. (3) 「数」「何」「幾」などを用いて表す数 ⇒ 「百」を仮名で書くことに伴って、助数詞によって「百」が促音化するかどうかや、「数十」に「個」が付く場合の読み方を示す用例を追加。
- ★ 2-1. (3) 【処理】表記法の新たなルールを踏まえて説明。  
「数」「何」「幾」などで表す位に、それより上の位があれば、その位を仮名で書き、後ろを区切って書く。  
(例) 二百数十 (2 ヒャク ■ スー ジュー 2 ヒャク ■ スー 数 1 0)  
千百数十 (セン ■ ヒャク ■ スー ジュー セン ■ ヒャク ■ スー 数 1 0)  
「数」「何」「幾」で表わす位が一の位の場合は、その上の位を数字で書き、4桁までは一続きに書く。  
(例) 千二百数枚 (1 2 0 0 スー マイ) … 「数」の上の位「1 2 0 0」を数字で書き、4桁なので一続きに書く。  
五百何個 (数 5 0 0 ナン コ) … 「何」の上の位「5 0 0」を数字で書き、3桁なので一続きに書く。
- ・ 2-1. (5) 漢字音であっても、「イチ (イツ) ・ ニ ・ サン …」の読みが変化している場合は仮名で書く。
- ・ 2-1. (6) [参考] 「一番」「一段」「第一」を仮名で書く場合について。

〔コラム6〕で〔参考〕とは別の視点から数字と仮名の書き分けを解説、数字の表意性のメリットについて補足。

「点訳ナビゲーター」も「てびき」の用例を補うものとして活用を（漢数字による部分一致検索、キーワードと数字によるand検索など）。

- ・ 2-2. (1) 和語読みの数を含む用例を増やし、「一つ」から「十」、「一日」から「十日」まで通して掲載、「ミッツ」と「ミツ」などを文脈に即して選択することを示す意図で併記。
- ・ 2-2. (2) 〔参考〕4と7の和語読みについて、本来、和語読みの系列にあるものか、漢字音読みの系列に入っている例外的な和語読みかの判断の仕方を説明。  
和語読みで始まって途中から漢字音になる場合は、3から数字で書くとよいことなど、「Q&A第2集」の説明を追記。
- ・ 2-4. 【備考】〔参考〕「四条河原町」と「西九条駅」「燕三条駅」の違いについて。
- ・ 2-5. 数字の間のハイフンの後ろに数符が必要なことを確認する〔参考〕は、数符の効力を終わらせる第1つなぎ符の役割を再確認するため。

### その3 アルファベット

#### 1 文字として書き表す場合

【改訂点など】

- ・ 1-1. 【備考1】「AMeDAS」を本則用例から独立させ、一続きの文字の一部であっても、後ろに続く文字すべてが大文字であれば、その位置に二重大文字符を用いて書く用例とした（3版で併記していた、それぞれの大文字に大文字符を前置する書き方は示さない）。
- ★ 1-1. 【備考2】大文字列の略称などの後ろに、複数を表すsなど小文字の要素が付加されている場合は、二重大文字符を用いた上で、小文字の前に改めて外文字符を前置して書く。  
※文字の形から機械的にこの書き方をあてはめると誤りになるケースがあるので、語の成り立ちや意味をふまえて判断する（「UDCast」などは第4章その7「体系の異なる点字表記」1.「英語」参照）。  
※単位記号や元素記号などはそれぞれの規則に従う。
- ・ 1-1. 【備考4】ピリオドが含まれる略称（「U. S. A.」など）は、ピリオドを省略する書き方と省略しない書き方を対等に認める表現に変更。  
いずれの場合も一つの外文字符に続けて書く。⇒ 人名のイニシャルと異なることを2-5. 〔参考〕に注意。
- ・ 1-2. 3版用例「Yシャツ」は第3章「アルファベットを含む複合語」、「PR不足」は第3章「連濁」に移動（分かち書きの視点が必要な用例であるため）。



## 2 語や文を書き表す場合

### 【改訂点など】

- ・ 2-1. 用例「1stコンサート」を追加。
- ・ [コラム9] に外字符と外国語引用符の使い分けについて整理。  
外字符で書くべき略称と外国語引用符で囲むべき外国語が複合した語は、一つの外国語引用符に囲んで書く（例「NTTcommunications」）。
- ・ 2-4. 「ŌITA」の例を追加し、大文字符とアクセント符を同時に付ける場合は大文字符を先にすることを示した。
- ・ [コラム10] に、数符の効力は数字と異なる形の文字を続けて書くことによって自動的に終わるのに対して、外字符の効力を終わらせて仮名文字を続けるためには常に第1つなぎ符が必要なことなど、数符と外字符の性質の違いを整理。

## 第3章 分かち書き

### その1 自立語と付属語

#### 【構成の見直し】

- ・「1 基本的な分かち書き」と「2 注意すべき分かち書き」に分けて記し、形式名詞以下を「注意すべき分かち書き」に位置づけた。
- ・「にして」「をして」「ずして」などの助詞の「して」は、「その2 複合語」3-2.「する」の【備考】に移動（サ変動詞との区別がポイント）

### 1 基本的な分かち書き

#### 【改訂点など】

- ・前文を入れ、先に文節・自立語・付属語などの説明を行った。
- ・1-1. 自立語 用例を整理し、できるだけ多くの品詞を入れた。
- ・1-2. 【処理】アルファベットで書かれた外国語に「な」「だ」が付く場合は、形容動詞かどうかにかかわらず区切って書くこととした。

### 2 注意すべき分かち書き

#### 【改訂点など】

- ・3版と項目の記載順序を変えた。
- ・2-1. 【備考】用例に、第1つなぎ符を用いる「1 k g 当たり、50あまり」を加えた。
- ・2-1. 【処理】「ものの」「ものを」は前を区切って書くことを示した。
- ・2-2. 「補助動詞」用例を三つのパターンごとに配列し[コラム13]で説明。
- ・掲載場所が異なっていた「辺・他・後・前・等」などを[コラム15]に「漢字の読みの違いによる書き分け」として整理。
- ・2-3. 「なさる・なさい」の項の【備考】を二つに分けて整理。【備考1】を《動詞の連用形に続く場合や「い」が省略されているときは続けて書く。》とし、【備考2】を《「お」が付いて名詞化した語に「なさる・なさい」が続く場合は区切って書くが、前の語の語尾が変化した場合は続けて書く。》とした。慣用的な挨拶言葉の規則を【処理】として追記。
- ・2-4. 【備考】「ない・なく・なし」が前の語と複合して形容詞となっているかどうかの判断の目安を[参考]で示した。
- ・2-5. これまで《形容詞などの「～く」》としていた項目を整理し、形容詞の「～く」は、[コラム11]の「活用する品詞」で説明し、「なくなる」を独立の項目と

した。区切る場合と続ける場合の区別のヒントを〔参考〕に補記。

- ・ 2-6. 初心者が間違いやすい「こうして、そうして、ああして、どういう、ある日」などの用例を加えた。
- ・ 3版では、形式名詞の【処理】にあった「漢字の読みの違いによる書き分け」を〔コラム15〕として説明した。また、ここに、複合語の2.【処理】にあった「等」「等々」なども含めた。
- ・ 2-7. 「音韻変化や省略形」の項目を新設し、これまで形式名詞・補助動詞の【備考】にあった内容をまとめた。〔コラム16〕に「くだけた会話」も新設。

## その2 複合語

### 【構成の見直し】

「その2」を次のように整理した。

- 1 短い複合語・接頭語・接尾語など
- 2 複合名詞
- 3 複合動詞・複合形容詞など
- 4 その他の注意すべき切れ続き
- 5 動植物名・理化学用語・医学用語・漢字や仮名で書かれた単位

### 1 短い複合語・接頭語・接尾語など

#### 【改訂点など】

- ・ 1-1. 「短い複合語・略語」の用例を見直した。「腰かける、暑苦しい、カビくさい」などは複合動詞・複合形容詞とし、「水玉、胃カメラ、視聴覚、税込み、骨抜き、読み書き、メル友、デパ地下、元カノ」などを加えた。【備考】の〔参考〕に、一語として熟していると判断するための要件を説明した。
- ・ 1-2. 「接頭語・接尾語などと自立語の間は続けて書く」と言い切っていたものを、例外もあるので「～続けて書くことを原則とする」とした。ここには、1字漢語で接頭語とは言いきれない語も含まれているので、「造語要素」という用語を残し、〔参考〕で定義した。【備考】〔参考〕として「同」「本」の連体詞的用法について説明した。

### 2 複合名詞

#### 【構成の見直し】

「2 複合名詞」の項を次のように分けて記した。

1. 3拍以上の意味のまとまり
2. 2拍以下の意味のまとまり

3. 2字以上の漢語
4. 漢字1字ずつが対等な関係で並んでいる語
5. 外来語
6. アルファベットを含む複合語
7. 数字を含む複合語

- ・前文と〔コラム17〕を設け、複合名詞の切れ続きに関する基本的な事項とキーワードについて説明。

#### 【改訂点など】

- ・2-1. これまでは【備考】としていた接尾語的な「次第・同士・加減」、動詞から転成した名詞も本則の用例に入れた。時代的背景やわかりやすさなどから用例を変更した。「花嫁姿 → 着物姿」「一人娘 → 一人芝居」、「狼男・女社長・雇われマダム・カラーテレビ」削除。
- ・2-1. 【備考】マスあけを含む複合語全体にかかる接頭語・造語要素をここに移動した。
- ・2-2. 「複合名詞」で「自立した意味のまとまり」は、「てびき」において「区切ることができる成分」であることを〔参考〕で補記。
- ・2-2. 用例には、2-1. と比較してみることができる語を入れた。「桜並木。松並木」「着物姿、晴れ姿」「左半身、右半身」「一人芝居、紙芝居」「手当たり次第、腕次第」「仲間同士、国同士」「うつむき加減、さじ加減」
- ・2-2. 3版の【備考2】の説明を補強し、【備考】とした。「自立性が強く意味の理解を助ける」の内容を《複合語を作る相手の拍数が長く、意味の理解を助ける場合》《1字漢語や和語が相手の語に対して自立性が強い場合》《複合名詞とはいえない場合》などは区切って書くことを記した。
- ・2-3. 2字以上の漢語について、語の成り立ちごとに項目分けして説明。
  - (1) 2字2拍の漢語は自立した意味のまとまりとして扱う。〔参考〕で2字2拍の和語に注意することを述べた。
  - (2) 区切ると意味の理解を妨げるおそれのある4字以上の漢語は続けて書く。語の成り立ち別に分類して説明。
  - (3) 中国の故事成語には手がかりとなる読み下し文を付記。
- ・2-5. 「外来語」の項を新設した。
  - (1) 外来語同士の場合、拍数による切れ続きの原則を述べた上で、長くても一続きに書く語を【備考1・3】で、短くても区切る場合を【備考2】で説明。外来語同士の複合語は中点の有無にかかわらず、本則に準じて切れ続きを考

えることを補足。第4章を参照するよう記載。

- (2) 2拍以上の外来語と漢語
- (3) 2拍以上の外来語と和語
- (4) 2拍の外来語でも日本語としての自立性が弱い語

〔コラム18〕で、切れ続きを考える際の目安を説明。

- ・ 2-6. 「アルファベットを含む複合語」アルファベットは1字でも自立した意味のまとまり。判断根拠を〔参考〕で補足。
- ・ 2-7. 「数字を含む複合語」を新設。2章の数字の項では説明しにくい複合語について説明。【処理】でローマ数字の用例を併記。原文の通りにローマ数字で書くことも数字で書くこともできる。

### 3 複合動詞・複合形容詞など

- ・ 3-1. 複合動詞の用例を多くした。
- ・ 3-2. 助動詞「させる」とサ変動詞「する」の活用形を含む「させる」の区別を〔参考〕で追加。
- ・ 3-2. 【備考4】〔参考〕で助詞の「して」についてのヒントを記載。

### 4 その他の注意すべき切れ続き

- ・ 4-1. 接続詞句・副詞句について〔参考〕で説明。
- ・ 4-2. 3版では2章にあった「PR不足」をこの項に移動。〔参考〕で連濁ではない語について注意。
- ・ 4-5. 「繰り返し言葉」【備考2】2拍以下の繰り返しで続けて書く場合を〔参考〕で説明

### 5 動植物名・理化学用語・医学用語・漢字や仮名で書かれた単位

- ・ 5-1. 5-2. 第1つなぎ符をはさんで続けて書くか、一続きに書くことができるのは「専門書などで」と限定。
- ・ 5-4. 「漢字や仮名で書かれた単位」の項目を新設。〔コラム〕に注意点を掲載。

## その3 固有名詞

【構成の見直し】

- ・ 固有名詞の項を次のように整理
  - 1 人名
  - 2 地名
  - 3 その他の固有名詞

- ・ 3版では第5章「その5 ルビやマーク類などの書き方」で扱っていた「中国・朝鮮の固有名詞の読み」をこの項に〔コラム22〕として掲載した。

#### 【改訂点など】

- ・ 固有名詞についての基本的な考え方を記した前文を追加

## 1 人名

- ・ 1-1. 外国人名中のダブルハイフンはマスあけに代えることを本則の用例で示し、【処理1】で特に必要がある場合につなぎ符を用いる方法と両方を記載。
- ・ 1-1. 【備考】で中国・朝鮮人名で姓名を続けて書く場合を説明。
- ・ 1-1. 【処理2】で名前が長く、その中に自立可能な意味のまとまりが複数ある場合は名前の中を区切って書くことができるとした。
- ・ 1-2. 【処理】、2-2. 【処理】人名・自然名に接尾語や造語要素が続いて文脈上誤解を生じる場合の処理として第1つなぎ符を入れる方法は、《誤解を生じる場合に限って》と、限定的な処理であることを強調。〔参考〕も付記し、さらに強調した。
- ・ 1-3. 【備考1】に「和宮様」を追加し、【処理1】で「栃錦さん → 千代の富士さん」、【処理2】で「バセドー氏病 → 応氏杯」とした。

## 2 地名

- ・ 2-1. 段階の内部に含まれる旧国名や合併する前の旧地域名、また後ろに「東・西・南・北」が付く場合のルールを【処理1】【処理2】として新たに加え、詳しく説明。旧国名や旧地域名は拍数にかかわらず区切る成分として扱う。後ろに「東・西・南・北・中」などが付く場合は自立した意味のまとまりとして区切って書く。
- ・ 2-1. 「なじみのない外国地名」の〔コラム〕を設け、意味のまとまりの判断ができない場合は、やむをえず、原音の区切り目やカタカナで書いたときに中点のあるところで区切って書いてもよいことを説明。
- ・ 2-2. 自然名の定義を説明し、自然名の固有名詞部分は1拍でも自立可能な意味のまとまりであることを〔参考〕で説明。
- ・ 2-3. 【処理】地名や自然名の普通名詞部分が外来語で表される場合、外来語が2拍以上であれば区切って書く。

## 3 その他の固有名詞

この項を独立して設け、多くの用例を挙げた。その構成要素によって、複合名詞

や人名・地名などの切れ続きの規則に従って書くことを記した。

#### その4 方言・古文など

- ・ 2. 古文・漢文の書き下し文を現代語の仮名遣いで点訳する場合も、現代語と働きが異なる語もあるので分かち書きに注意が必要であることを示し、そのポイントを〔参考〕に記した。

## 第4章 記号類の使い方

### 【構成の見直し】

- ・記号の種類が多くなったこと、3版の「その6」を各該当項目に分散したことにより、4章全体を以下のように構成し直した。

その1 句読符

その2 囲みの記号

その3 線類

その4 伏せ字とマーク類

その5 その他の記号類

その6 記号が連続する場合の注意

その7 体系の異なる点字表記

★点訳者挿入符は「点訳挿入符」に名称変更

### その1 句読符

#### 【改訂点など】

- ・「1. 句読符」 省略符としてのピリオドの後ろに一続きに書き表すべき語が続く場合は、ピリオドの後ろに第1つなぎ符を用いることの【処理】を追加。
  - ・「2. 疑問符・感嘆符」[参考] 疑問符・感嘆符が単独で用いられる場合、囲み符が付いていない場合についても記載。
  - ・「4. 中点」は、(1)点字で用いる中点と(2)点字では用いない中点に分けて説明。
- ☆「4. 中点」 言い換えの中点は用いず、マスあけに代えることとした。
- ・「4. 中点 (2)点字では用いない中点」で、箇条書きなどで各項目の行頭に小さな黒丸や中点が用いられていても点字では中点を用いないことを記す。

### その2 囲みの記号

#### 【改訂点など】

- ・「1. カギ類」「2. カッコ類」の「第1～」 「二重～」と「第2～」の関係を整理し、書き方を揃えた。
- 第1カギ（カッコ）を用いることを基本とし、その中にさらにカギ類（カッコ類）が必要であれば、ふたえカギ（二重カッコ）を用いる。・・・第1カギ（カッコ）・ふたえカギ（二重カッコ）と区別して他のカギ（カッコ）を必要とする場合に、第2カギ（カッコ）を用いる。
- ☆「1. カギ類」で《一つの文の中に、カギ類で囲んだ語句や文が並列する場合》



を一マスあけに変更。「一つの文の中」すなわち、直後を助詞で受けるなど、文が続いていることが要件となる。

★「1. カギ類」の【処理2】に《第1カギに囲まれた中であっても、カッコ類や指示符類の内側であれば、誤読のおそれがないので第1カギを用いることができる》を加え、同様に「2. カッコ類」の【処理2】に《第1カッコに囲まれた中であっても、カギ類や指示符類の内側であれば、誤読のおそれがないので第1カッコを用いることができる》を追加。

・「2. カッコ類」で、カッコ類の前を続けるか切るかについて[参考]に詳しく説明を補い、(株)のような略語が団体名の後に来た場合も区切ること、カッコの直後に前の語を説明する第2カッコが続く場合は、続けて書くことを示す用例を追加。

・墨字の形が同じでも、点訳上カギ類を用いた方がよい場合とカッコ類を用いた方がよい場合があることを、[コラム23]で具体的に説明。

☆「3. 指示符類」で、「傍点筆者」とある場合の、用例の処理方法を変更。

※点字資料で開き記号と閉じ記号に囲む文字を「メメ」で表したり、点の位置を明確にする目的で「メ」を添えたりする方法がある。

・「5. 点訳挿入符」【備考1】を規則の部分と[参考]に分け、[参考]に点訳挿入符を用いる際の注意についてまとめた。

・「発音記号符」は「表記法」の扱いが変更になったため、「その5 その他の記号類」で、「8. 発音記号符」として扱うこととした。

### その3 線類

#### 【改訂点など】

・「1. 棒線・点線」の【処理2】《点線の後ろに促音が単独で書かれている場合》の処理に、さらに、語句や文がなく、単独の促音のみが点線に接する場合にも言及した。

・「3. 波線」の【備考】に《範囲の始まり、あるいは終わりが無い場合》の波線の処理方法を記した。波線を用いることもできるが、文脈上自然であれば、「カラ」「マデ」などと置き換えることもできる。

・「3. 波線」の【処理2】に《数量・時間・場所などの範囲を表す用法以外の墨字の波線》について処理方法を示した。

### その4 伏せ字とマーク類

#### 【構成の見直し】

・マーク類が増えたため、この項を新設し、以下の記号をここに入れた。

1. 伏せ字
2. パーセント
3. ナンバーマーク
4. アステリスク
5. アンドマーク
6. アットマーク

【改訂点など】

- ★伏せ字の後ろに、数字やアルファベットが続く場合は、第1つなぎ符は用いない。  
後ろが仮名の場合のみ第1つなぎ符をはさんで書く。
- ★「3. ナンバーマーク」 ナンバーマークは墨字の「ハッシュタグ」にも対応させて用いる用法を追加。
- ★「3. ナンバーマーク」「4. アステリスク」に《ひと続きに書き表すべき1語中で後ろに仮名が続く場合は、第1つなぎ符をはさんで書く》ことを追加
- ・「3. ナンバーマーク」 ハッシュタグにも用いるが、後ろに情報処理点字記号が含まれる場合の【処理】を追加。ハッシュタグも含めて全体を情報処理点字の囲み記号で囲んで書く。
- ★「6. アットマーク」を新設

## その5 その他の記号類

【構成の見直し】

- ・この項を次のように整理した。
  1. つなぎ符類
  2. 小見出し符類
  3. 文中注記符
  4. 星印類
  5. 詩行符類
  6. スラッシュ
  7. 空欄符号
  8. 発音記号符
  9. 小文字符

【改訂点など】

- ・「2. 小見出し符類」で、2段階の小見出し符が必要な場合は、第1小見出し符、第2小見出し符の順に用いることを加えた。

- ・「2. 小見出し符類」【備考】を、《小見出し符類は、5マス目から書き始める見出しの後ろに用いることはできない。また、カッコの中のコロンに対応させて用いるなど、行の途中で用いることはできない。》とし、「また、～」以降の注意を追記した。
  - ・「3. 文中注記符」に「一つの語句に複数の文中注記符が付く場合」の規則を入れた。また、注記の入れ方についての説明を詳しくし、用例も変更した。
- ☆「6. スラッシュ」の項を新設し、その注意を〔コラム25〕としてまとめた。スラッシュは外文字を用いて書く一続きのアルファベットの間にある場合にだけ用いることとした。単位記号の中で用いるスラッシュについては、その7「4. 単位記号」に記載した。
- ・「7. 空欄符号」《空欄の数を「⋮⋮⋮」の数で示す場合、その数は点字のマス数とする。》という【処理】を追加。
  - ・「8. 発音記号符」に、/~/で囲まれていたり、囲み記号なしで書かれていても、発音記号であれば、日本語の中では、⋮～⋮で囲んで書くことを【処理】として追加。

## その6 記号が連続する場合の注意

### 【改訂点など】

- ・「1. 記号間の優先順位」第1順位の(1)に小見出し符類、詩行符類を追加。(4)に《文中注記符は、それが指し示す語句や文との間を続ける。》を追加。
- ・「1. 記号間の優先順位」の【備考】として「アルファベットなどにつけるピリオドの後ろに囲みの記号が続く場合」の注意を追加。
- ・「2. 読点が他の記号と連続する場合」(1) 読点の後ろに、第1カギ・ふたえカギ・カッコ類の閉じ記号が続くときには読点を省略するとしていたものを、「省略することを原則とする」として、読点を省略せずに書くことができる場合を【備考】として追加。(2) 指示符類の閉じ記号の前を一マスあける場合は、指示符類の閉じ記号だけを次の行に移してはならないことを追加。
- ・「3. 囲みの記号が他の記号と連続する場合」(3) 指示符類の内側に第1カギが続いてその間を一マスあける場合、《指示符類の開き記号だけを行末に残したり、閉じ記号だけを次の行に移したりしてはならない》ことを追加。

## その7 体系の異なる点字表記

### 【構成の見直し】

- ・次のように整理し、それぞれ「てびき3版」より詳細な説明を行った。

#### 1. 英語

2. ホームページやEメールアドレス
3. 数学記号
4. 単位記号
5. 理科記号
6. 楽譜記号

【改訂点など】

- ★「1. 英語」は、2015年の「英語点字表記の変更に伴う『点訳のてびき第3版』の変更について」を基に掲載した。(5)二重大文字の効力を終わらせる記号として「終止符」「大文字」を追加記載し、用例も追加した。
- ★「2. ホームページやEメールアドレス」用語の変更に伴って変更。
  - 情報処理用点字 ⇒ 情報処理点字
  - 情報処理用囲み符号 ⇒ アドレス囲み符号
  - 数字フラグ、単独大文字、連続大文字、小文字フラグなどの特殊な名称は使わない ⇒ 数符、大文字、二重大文字、小文字
- ★「3. 数学記号」ルールの変更により以下の2点を変更
  - ・ 第1カッコから始まる数式の始めにも数式指示符を用いる
  - ・ 一般書の文章中に数式を書き表す場合には、原則として前後ろを一マスあける（関係符号を含む場合も同様）
- ・ 3版では第2章にコラムとして掲載していた四則記号などを用いないで書く書き方を「3. 数学記号」の【備考】とした。
- ★「4. 単位記号」 単位に含まれる漢字や仮名の部分を第1カッコで囲み、単位の最初に来る場合はカッコの前に外文字をつけて用いられるようになったことから、単位の書き方を変更し、用例を追加
  - ・ 「4. 単位記号」に、スラッシュの前や後ろが仮名の場合やスラッシュの前後が共に仮名の場合は、文脈や資料の種類によって、スラッシュを用いないで、仮名に置き換えて書くこともできることを【処理】で説明。
  - ・ 3版では第2章に掲載していた「コラム」「単位記号は大文字・小文字に注意！」を「4. 単位記号」に移し、「リットル」の大文字・小文字は、点訳では原文通りとすることも追加した。

## 第5章 書き方の形式

### 【改訂点について】

#### その1 本文の書き方

★「5. 箇条書き」の項目追加。

- ・「6. ニマスあけ」 3版の「ニマスあけ」の〔コラム〕に「行中のマスあけ」も加えて〔コラム29〕を掲載。表中や行頭・行末を除き、1行中のマスあけはニマスが最大であることを説明した。

#### その2 見出しの書き方

- ・見出しの段階が多いときの処理について〔コラム30〕を追加し、具体的に説明。
- ☆「3. 副見出し」の項目新設。段落挿入符類を用いる用例も追加。
- ・「6. 出典表示」に〔コラム31〕を設け、より具体的に説明した。

#### その3 詩歌・戯曲などの書き方

- ・「1. 詩」に歌詞などで番号が付く場合を追加し、用例も入れた。
- ・「3. 戯曲・対談などの書き方」で、「ト書き」と「情景の説明」を分けて説明した。また、人物名を一マス目から書く書き方を、【処理】に移した。

#### その4 表や図の書き方

- ・「表の書き方」に「ハンドブック5章編」の説明を採用し、〔コラム32〕も追加し、説明を詳しくした。
- ・「図の書き方」に、文章化する場合、作図ソフトを使用する場合の注意を記載。
- ・「挿絵」や「写真」「注記」の処理方法を二つの〔コラム〕に記載した。
- ★「3. 区切り線・枠線」の項目を新設。区切り線は、1行あけより大きな区切りを示すこと、また、必ず用いなければならないというものではないことを記した。

#### その5 ルビやマークなどの書き方

- ・難解な漢字やアルファベットの後ろにカッコで読みを記してある場合を【処理】として追加。
- ・マーク類の書き方に地図記号や絵文字、顔文字の書き方を追加。
- ・3版では4章の〔コラム〕として簡単に示していた数の略記を、「3. 数の略記」として項目を追加。
- ・「3. 数の略記」に、時間の略記にコロンを用いる場合の注意《コロンの後に数符

は用いない》を追加、下がり数字について〔参考〕に説明。

## その6 本文以外の割り付け

- ・『「サピエ図書館」登録点字文書製作基準』や「ハンドブック5章編」の内容から、パソコン点訳に関する部分を取り入れた。
- ・「2. ページの付け方」【処理】 パソコン点訳では、偶数ページが空白になる場合もページを入れることを明記した。（サピエ登録データにおける推奨処理を明文化）
- ★目次の見出しとページ数をつなぐ点は、《②の点や⑤の点など》を用いることを示した。
- ・原本奥付に記載する項目は、原本の奥付に記載されている内容のうち必要事項を取捨選択することとした。
- ・点訳書奥付の点訳者・校正者は、それぞれの氏名を記入しても点訳・校正を行った施設・団体名を記入してもよいとした。
- ☆「9. 点訳書凡例」の項を追加。掲載位置、ページ付け、点訳書凡例が必要な場合について示した。

## 参考資料

### 【構成の見直し】

- ・「サピエ」と「点訳ナビゲーター」を加え、「参考書籍」は、流動的なので削除した。

### 1. 古文・漢文の点字表記

3版から規則の変更はないが、一部説明を詳しくし、用例を追加した。

#### 「古文の点字表記」

- ・「その1. 和語の仮名遣い」に、和語の動詞・形容詞・形容動詞のウ音便・促音便の扱いについて、【備考1】で取り上げた。
- ・【備考3】助詞の「は」「へ」に用例を追加した。

### 3. 著作権法（抜粋）

- ・2019年1月1日施行の最新の内容を掲載した。
- ・第37条（視覚障害者等のための複製等）のほか、第20条（同一性の保持権）についても掲載した。

### 4. 郵便法・内国郵便約款（抜粋）

- ・最新の内容を掲載した。
- ・内国郵便約款については、大きさ・重量制限、開封について、また第四種郵便に記載、添付できる事項についても掲載した。

### 5. サピエ

- ・3版では、1章に載せていた「サピエ」について、ここで詳しく記した。

### 6. 点訳ナビゲーター

- ・新たに「点訳ナビゲーター」の説明を加えた。検索の際注意すべき事項や便利な検索方法について紹介した。

### 7. 数学記号・外国文字

- ・「2. ギリシャ文字」に、ギリシャ文字の読み方、および一般書に使用する際の注

意を追加した。

- ・「4. フランス・ドイツ・ロシア語など」で、「World Braille Usage」に記載されていないフランス語の「i ò」を削除し、ドイツ語の「ß」の書き方を示した。

## 8. 主な単位記号

- ・「単位記号の書き方」を、第4章その7「体系の異なる点字表記」に移した。
- ・「リットル」の書き方を変更した。
- ・新たに、「mW、MW、 $\mu$ Sv」を加え、単位記号の中の大文字・小文字の書き方を示した。また、「情報」の単位を加えた。

## 12. 用語解説

- ・本文中に解説してある語を除くなど、掲載の方針を明らかにして、コンパクトにまとめた。

(以上)